

< 評論 >

日本語「レクリエーション」の解釈をめぐって — 経験知からの視点 —

高橋 和敏¹

Origine and Interpretation of RECREATION as the Japanese Word

Kazutoshi Takahashi¹

1. はじめに

筆者は、実質的には昭和28年(1953)からレクリエーションに関わってきたが、その間ずっといわば“小骨が喉に痞えた”ように感じてきていることがある。

これは、一般の人たちに「レクリエーションを何とか短く、的確に説明できないものか・・・?」ということである。「レクリエーションは何ですか?」と問われると、ごく通俗的には「上手に遊ぶこと」と筆者は答えることにしている。しかしこれとて満足のいく回答にはならない。大方は怪訝な顔をする。補足説明が必要なのである。

さらにもうひとつの問題がある。それは「レクリエーションの言葉自体は広く認知されているが、日本においては社会的重要度の認知が低い」という思いである。

これまでに幾多の内外の識者が、レクリエーションを、語源的にも、内容的にもその意味を尋ねてきた。そのそれぞれが、有意義な手がかりを与えてくれたと思う。

しかしながら、この分野に長く関わるにつれて、レクリエーションの事象はその語義を超えたところ、人間の心情の底に流れる何かがあるのではないかと思うに至った。

何かがあるとするれば、「レクリエーションの背景を探ることによって、解明の手がかりが見出せ

るのではないか?」と考えた。

さまざまな背景がある中で、筆者の興味を惹いた“日本語としてのレクリエーション用語自体の背景”と“宗教的背景”を選んだ。本稿においては、それらを問題としてその何かを探る一端としたい。

2. “レクリエーション”は外来語である

(1) 日本語の表記と呼び名の混乱

もちろん“レクリエーション”の原語は英語の“RECREATION”である。第二次世界大戦の戦前と戦中および戦後の関係書を、表記と呼び名に焦点を当てて調べた。

ちなみに磯村英一は[・・・吾々は普通英語の「リクリエーション」と読んで居たのであるが、数次の会合の結果「厚生運動」と名付けるに至ったもので、必ずしも厚生省の仕事と直接の関係を有するものではない。・・・]^(註1)と、カナ文字でリクリエーションと表記している。

また保科胤も[・・・即ちアメリカには・・・リクリエーション運動として極めて多面的な発達を見せている]^(註2)と、次に吉阪俊蔵と上田久七は[厚生運動に略当る英語のレクリエーションといふ言葉は金を出して芝居を見たり、寄席に行ったり、其の他広く休養気晴らしの行為を指すが・・・]^(註3)との見解を示している。

1 東海大学名誉教授 Professor Emeritus, Tokai University
余暇問題研究所顧問 Advisor, Japan Institute of Leisure Services and Education
日本レジャー・レクリエーション学会顧問 Advisor, Japan Society of Leisure and Recreation Studies

前二者は、RECREATION をカナ文字で同様にリクリエーションと表記している。彼らはRECREATION を RE-CREATION の意で発音し、そのままカナ文字で表記したものと思われる。後二者すなわち吉阪と上田は、現在と同じく、レクリエーションと表記している。

戦前・戦中においても、識者でさえ、このように曖昧に二通りの呼び名と表記で使われていたことが分かる。

その後、第二次世界大戦終了後は筆者の尊敬する3先達が図らずも同年同時期に、現行のレクリエーションについての理論書を執筆出版した。すなわち前川峯雄^(註4)、白山源三郎^(註5)、および三隅達郎^(註6)である。

これらはすべて英語の RECREATION を、その発音に従ってカナ文字で表記されたものである。この三者には僅かながら表記にニュアンスの相違が見られる。このように当時の識者でも、いかに表記するかが問題であったことは事実であろう。

その証拠に白山は、同文館からの出版書“レクリエーション”の緒言3項に“レクリエーションの読方ならびに邦訳の問題”と題して「再創造と云う意味にこの文字を用いるには RE に力を入れて発音すればよい。これを片仮名で書く場合、この区別をするために再創造の場合は、リクリエーションと書き、遊戯・娯楽の場合には、レクリエーションと書くべきである。ある米国人がこのことについて特に注意してくれたことがある。」と呼び名の問題と日本語訳の難点を述べている。(同書 pp9-10)

期を同じくして、昭和24年(1949)6月10日施行された社会教育法(昭和24年6月10日法律209号)の第1章総則第2条社会教育の定義の中に「・・・主として青少年および成人に対して行われる組織的な教育活動(体育及びレクリエーションの活動を含む)をいう」とあり、日本において初めて法律上における日本語としての“レクリエーション”の表記と呼び名が決められた。

それ以来公式には、レクリエーションの表記と呼び名が統一されて使われてきた。

当時括弧付きながら、社会教育法に体育とレクリエーションの言葉を入れるように尽力した文部

省体育局振興課西田泰介^(註7)は、行政の見地で「それにもかかわらずレクリエーション運動には問題が多かった。まず、レクリエーションということばをどうするかが大問題であった。この難しいことばを理解し、広く普及するためには適切な日本語に訳すに限る。ところがどう考えても、みんなで話し合ってみてもぴったりの日本語が出ない。とうとうそのまま、使っていて、途中でもよいことばが発見されたらその時に改めようということを出発した。後味の悪いことであったが仕方がなかった。今日でこそ、ようやく一般に理解されるようになったが、その間約二十年を要している。もし、適切な日本語が使われていたら、日本のレクリエーション運動はもっとちがったものになっていたであろう。ことばが理解されないばかりに、関係者が予算をとるのにも、一般に説明するのにもどれだけ苦勞したかわからない。」と、レクリエーションの言葉の問題点とその使用の経緯を回想風に指摘している。(財団法人日本レクリエーション協会編日本レクリエーション協会二十年史、昭和41年11月1日、pp47-48)

このように日本語としてのレクリエーションは、あくまで外来語であり、その真意を理解するには多難を極める。

(2) 言葉に内在する抽象性と広域性

レクリエーションという言葉は外来語であるとともに、厄介なことに、ある概念を表わす抽象名詞である。かつ、その言葉を意味する範囲が広い。したがってイメージし難い。たとえある程度イメージができて、見方によっては、様々な似たような解釈ができる。たとえば国語辞典類には「仕事や勉強などの疲れを、休養や娯楽によって精神的・肉体的に回復すること。また、そのために行う休養や娯楽」(広辞苑：新村出編、岩波書店、3版、S58)と、いわば消極的解釈が採用されている。休養や娯楽など具体的な個々の活動へのイメージづけがなされやすい。また福武国語辞典(樺島忠夫他編、講談社、2版、1989)は「心身の疲労回復のために行うスポーツ・娯楽などの余暇活動。また、それを行うこと。気晴らし、休養」と、前者とは異なる表現を用いているが、結局はある漠然とした消極的な特定活動をイメージさせる解釈がなされている。

またレクリエーションという抽象名詞を活動領域で説明しようとする、これまた広範にわたり、羅列しきれないほどになる。さらに、分析的思考が強くなるとますます細分化される。その結果、全体を把握し難くなる。

レクリエーションを解釈するには、「ふつうにはつながりの見えない領域を統合化して、とくに横のつながりを顕在化しなければならない」との思いに馳せられる。余談になるが、2010WLO コングレスでは、“Defragmenting Leisure Studies in the 21st Century”と題して基調講演がなされた。レジャーの世界でも細分化あるいは断片化が問題になっているのも事実である。その後のジャーナルでもこの問題が採り上げられている。

しかし、画期的な考えは現在のところ見当たらない状況にあるようである。(WORLD LEISURE JOURNAL: Vol. 53, Issue 1 & 2, 2011)

3. 宗教観に基づく人間観の相違が根底にある

(1) 宗教・宗教意識・働き観の相違

アメリカ合衆国は、キリスト教国として知られている。現実には様々な宗教が混在しているが、ほとんどがキリスト教徒である。国を動かすのもキリスト教が原動力となっている。旧約聖書^(註8)の冒頭文は「はじめに神は天と地を創造された」(1章1節)である。神が世界とその中の万物を創造したと断言している。したがってキリスト教の教えはその世界観の上に展開されているということになる。

旧約聖書2章には「神は、万物を創造し終えて、粘土で神に似せて人を創り、これに命を吹き込んで、生きる者とした」(2章7節)とある。このようにみえてくると、キリスト教の神は、神がまず存在し、その神が人間を創り、すべてを生み出したわけである。すなわちキリスト教は一神教であり、絶対神として信じられている。“この地球上の万物、すべての出来事は、まず、はじめに神ありき”である。

神の創造によるはじめての人間はアダム(ADAM)と名付けた。神はそして“エデンの園(GARDEN OF EDEN)”をつくり、中央に“命の木”と“善悪の知識の木(TREE OF KNOWLEDGE

OF GOOD AND BAD)”を食料や観賞用として様々な木々を繁らせた。そして彼を住まわせ、維持管理に当らせ、神はアダムに「善悪の知識の木以外は、その中にあるどのような木からの実を食べてもよい。もし食べてならない木からの実を食べたら死ぬであろう」と命じた。(2章9節、15～17節)

その後、アダムはエバと結婚して、互いに助け合う者同士としてエデンの園を守っていたが、有名な“禁断の木の実”事件が起こる。悪魔に取り付かれた蛇(SERPENT)にだまされたエバは、神に食べるなど命令されていた“善悪の知識の木”を食べて、アダムに勧めた。アダムも食べてしまった。(3章1～6節)

そこでアダムはエデンの園から追放され、「あなたは一生苦しんで地から食物を取る。・・・あなたは顔に汗してパンを食べ、土にかえる」(3章17～19節)と、旧約聖書創世記に記されている。

このことは、人類の祖アダムの罪を受け継ぎ、人が働かなければならないのは根本的に罪だと捉えること、すなわちキリスト教的働き観と解釈できる。このことに関連して、日本人が日曜日に働くことは「人間の道に反してアンフェアだ」と、一部のアメリカ人が日本人を非難したことがある。これは神が天地創造の業を終えて「神はその第七日を祝福して、これを聖別(HALLOW/HOLY)された。・・・」(2章3節)ので、人間はその日は仕事を休み、神に仕える日、働いてはいけないというのである。

ひるがえって日本の宗教は、主に仏教として知られている。しかし日本においては、縄文時代・弥生時代から、自然界に神々がいると信じられてきたことは明白である。八百万の神がそれである。かくして日本の神々は、地域に密着した死活上の神、多彩な神々、自然の中に住む神々という特徴をもつ。6世紀になり、仏教が伝来してくるとともに、従来から信じられてきた神々を神道と呼ぶようになった。これらは相対することなく、神仏混淆(習合)という独自のあり方で共存、調和してきた。「困ったときは、神様・仏様に手を合わせる」ということは卑近な例である。したがって、日本人の宗教意識は無自覚が多く、民間伝承を土

台とする民族信仰というべきものであろう。誰もが神の恩恵を受けることと信じられている。

それに比べ、欧米人キリスト教徒は宗教意識が強く、自覚的である。「その一つの神（絶対神）を信じることによって救われる」「深く神を信じるのが神に近づける」と信じられている。

(2) 創世記における“再創造”らしき記述

創世記において、RE-CREATIONに関わりがあるらしい記述は有名な“ノアの箱舟”の物語である。「神が地を見られると、それは乱れていた。すべての人が地の上でその道を乱したからである。」(6章12節)として、「神はノアに言われた。わたしは、すべての人を絶やそうと決心した。彼らは地を暴虐で満たしたから、わたしは、彼らを地とともに滅ぼそう。」(6章13節)

そして、ノアはすべて神の命じられたようにしたとのこと。ノアはノアの一族や動物たちを連れて箱舟に乗って洪水を避けた。洪水は、地上のあらゆる生き物を滅ぼし、やがて水が引き、箱舟はアララト山（現在のトルコにある）に漂着したといわれる。(8章4節)これは、現在も痕跡情報がある。真偽の程は不明である。

ここからが、神の命に従って人の手で地上での生活が始まる。これが再創造として受け取るか受け取らないかの論議が分かれるところである。しかし実際に創世記にはRE-CREATIONという言葉は使われていない。あくまで創世記9章の推測的解釈に止まらざるを得ない。

4. むすび

以上、日本語としてのレクリエーションの解釈を難しくする要因として、外来語としてみた場合と、宗教と宗教観の違いに起因する場合のみを採り上げてみた。しかし考えれば考えるほど、連鎖的に問題の顔がたくさん見え隠れする。たとえばレジャー・レクリエーション学会においてはもちろん、日常生活においても、「外来語のカナ文字を使用する場合には慎重でありたい」と思うところである。

まずそもそもの問題は、外来語のカナ文字のままレクリエーションを、行政的にも、使ったこにある。西田が述懐しているように、レクリエーションという言葉が日本語に訳そうとして、みん

なが話し合っても、適切な日本語は見当たらなかった。とりあえずそのままカナ文字で、社会教育法に載せたということが事実であった。これによってレクリエーションは法的にも、社会的にも出生権を得たことになった。

しかし、外来語の抽象名詞であり、端的に意味を表現できないまま、一般に普及されてきた。したがって多くの人々は個人が経験した範囲で印象的な活動をレクリエーションと呼ぶようになってきた。当然経験が違えば、その印象と内容も異ってくる。とくに第二次世界大戦後の荒廃した国土においては、多くの人々に強いインパクトを与え、希望をもたらしたフォークダンス、集団ゲーム、ソングなどとそれら活動を学校教育にも採り入れられた事実もあり、それら特定の活動へのイメージが先行してきた。

現在の社会状況においても、厳然としてこれら活動の価値が失われるものではない。とくに高齢者福祉分野においては、集団ゲーム、歌、踊りなどが活用されている。また、企業組織においても、社員間のコミュニケーション・ツールとしての集団ゲームの価値が見直されている。(レクリエーション、アイスブレイキングなどの用語使用の問題はあるが)

RECREATIONの解釈の真実は、現在のところ、アメリカにおいて初めてRECREATIONの言葉を使用したとみられる関係者（とくにJoseph Lee）の資料を辿るしかないと思われる。Joseph LeeはPlayground Association of America（現在のNRPA）からPlayground and Recreation Association of Americaへの改称時（1911）に会長をしていた。またJoseph Leeは、アメリカのレクリエーションの父と称されている。

ともあれ煎じ詰めると、先に述べた項目を超えて複雑に絡み合っ、日本語としてのレクリエーション事象が進行している事実である。この事実を直視し、深い洞察力と包容力をもちながら、“人間生活の何時の時代でもどこにでも入り込む、ちょうど潤滑油のような粘性のある存在”であることを認めることが求められているようである。

しかし、まだまだ「日本人の自然観」「日本人の遊びの本質」「日本人の思考特性」など熟考しなければならない幾多の課題がある。とにかく、

人間に関わることは興味深い。しかし論理を超えたところに真実がありそうである。

こう考えているうちに、夏目漱石の草枕冒頭文が頭をよぎった。曰く“智に働けば角が立つ、情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角にこの世は住みにくい。”レクリエーションの“何か”を探る旅は、まだまだ続いて終わりそうがない。

註

- (1) 磯村（1903–1987）は、東京市主事を経て都立大学教授、東洋大学学長などを歴任。都市社会学者（厚生運動概説・常盤書房・昭和14年・p61）
- (2) 保科（M36–S16）は、日本厚生協会主事。当時から膨大なノートを残す。学生時代からの友人高山洋吉によって編集出版（国民厚生運動・栗太書店・昭和17年・p9）
- (3) 吉阪は、日本商工会議所理事長、日本厚生協会理事。上田は、日本厚生協会主事、厚生運動普及に尽力。（厚生の手・弘学社・昭和19年・p20）

- (4) 前川（1906–1974）は、東京教育大学教授、日本レクリエーション学会初代会長。（レクリエーション・科学教育社・昭和24年・表題）
- (5) 白山は、関東学院大学院長、日本水泳連盟理事、日本泳法家元、日本レクリエーション協会理事。（レクリエーション・同文館・昭和24年・表題）
- (6) 三隅（1899–1994）は、戦前日本厚生協会主事、国際基督教大学教授、関東学院大学教授を歴任、日本レクリエーション協会理事。（レクリエーション・三省堂・昭和24年・表題）
- (7) 西田は、文部省体育局振興課長。社会教育法制定、体育指導委員制度成立に尽力。（日本レクリエーション協会二十年史・日本レクリエーション協会・昭和41年・p45–p60）

（受理：2013年9月17日）

